

樋口一葉

若葉かげ

若葉かげ

(明治三十四年四月―五月)

花にあくがれ月にうかぶ折々のこゝろをかしきもまれにはあり。おもふこといはざらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるはもとより世の人にみすべきものならねばふでに花なく文ふみに艶つやなし、たゞその折々をおのづからなるから、あるはあながちにひとりぼめして今更におもなきもあり、無下むげにいやしうてもものわらひなるも多かり。名のみことごとしう若葉かげなどいふものから行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

卯うのはなのうきよの中のうれたさに

おのれ若葉のかげにこそすめ

卯うづき月十一日 吉田かとり子こぬしの澄田川の家に見の
 宴に招かるゝ日也。友なる人々は師の君のがりつどひて
 共に行き給ふもおはしき。おのれは妹のたれこめのみ居
 て春の風にもあたらぬがうれたければ、いでやともにな
 どそゝのかして誘いざなひ出いでぬ。花ぐもりとかいふらんやう
 に少し空打霞うちかすみて日のかげのけぎやかならぬもいとよ
 し。上野の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月

はくまなきをのみ愛めづるものかは、いでやその散ちりがたの木
 かげこそをかしからめといへば、ならびが岡ほっしの法師ほっしのま
 ねびにやといもうとなる人は打うちゑみぬ、さすがに面おもなく
 て得えいはず成なりぬる事もをかし。我わがすむ家より上野の岡は
 遠とほきほどにてもなかりければ、まだ朝露あさつゆのしげきほどに
 来きにけり。聞きけんやうにもあらず、清水きよみづの御堂みだうの辺あたりこ
 そ大方おほかたうつろひたれど、権現みんげんの御社みやしろの右手みぎての方かたなど、若
 木わかぎながらまださかり也なりき。さと吹く朝風あさかぜのひやゝかなる
 にぬれたる花はなびらの吹雪ふぶきと斗ばかり散ちりみだるゝはいとをしく
 て、おほふ斗ばかりの袖そでもがななどいはまほしけれど、例れいの

と笑はれんがうしろめたくてやみぬ。澄田川にも心のい
 そげばをしき木かげたちはなれて車坂下るほど、こゝは
 父君ちぎみの世にい給ひし頃花の折をりとしなればいつもいつもお
 のれらともなひ給ひて朝夕立ならし給し所よと、ゆくり
 なく妹のかたるをきけば、むかしの春もおもかげにうか
 ぶ心地して、

山桜ことしもにほふ花かげに

ちりてかへらぬ君をこそ思へ

心細しやなどいふまゝに、朝露ならねど二人の袖はぬ
 れ渡りぬ。山下といふ所よぎりてむかし住すみけん宿のわた

り過すぐるほど、よの移り行ゆくさまこそいとばかりしるけれ。まだ八
 とせ斗ばかりのほどに下寺といひつるおきつち所は鉄の道引みちひき
 つらねて汽車の通ふ道とは成なりぬ。其車そのとゞむる所を始め、
 区の役所、郵便局など、其頃思ひもかけざりしものあま
 た所出来いできにたり。わがはらから難波津なにはづならふ頃、その師し
 のがり行ゆくとて常にこのあたり行ゆきかよふほどやがてはかく
 ならんなど人の語りて聞かせつれど、其そはいつのよの事
 なるべき蜃気楼のたぐひにこそと打笑うちゑみ草ぐさにしたりし
 も、よの事業の俄にはかなる早くも聞けんやうに成なりにたる
 を、おのれらこそあれ其折そのをりに露つゆたがはず何仕なにしいでたる事

はなくて徒いだづらにとしのみ重ねたるよと打うちなげかれぬ。こ
 のほとりより車ものして角田河までは行ゆきたり。枕まくらばしと
 いふより車はかへしにき。散ちりもはじめず咲さきものこらぬ花
 の匂におひいとこまやかに、遠くのぞめば只一村ひとむらの雲うみかと斗ばかり
 うたがはれ、近く見渡せば梢しんがきにつもる雪かとのみ見ゆ
 める。まだ人々少なきほどゝて花のかげを我わが物にして
 みありくほど、まこと小蝶こてふに身をかへたらん心地こころとする。
 秋葉、しら髭のわたりよぎりて梅若うめわかの塚つかまでも花を探り
 き。このあたりには人のかげもなきがいと嬉うれし。かへさ
 には長命寺の桜もちる求めて妹に渡しぬ。こは母君にま

むらせんとて也。^{なり}おのれは三めぐりのほとりにて袂^{たもと}わ
 がちぬ。かとり子^こぬしの家はその御社^{みやしろ}のそがひに高くそ
 びえたる三階^{さんがい}がそれなり。おのれより先にみの子^この君、
 つや子の君おはしき。例のざれごといひかわすほどに、
 今日^{この}は大学の君たちきそひ舟^{ぶね}ものし給ふとてはや木ま木
 まにこぎいで給ふも折からいとうれし。遠眼鏡ものして
 見渡せば、此^{この}高^{たか}どのゝしたこぎ行^{ゆく}やうにぞみゆる。赤し
 ろ青紫など組々にて服の色わかち、おのがじゝ漕^{こぎ}きそふ
 さま水鳥などのやうに心のまゝ也。堤^{ひくかた}にはその友だちの
 君なるべし、赤よ白よなどおのが引^{よば}方を呼はげまして心

もとなげに舟とともにかけ給ふもいといさまし。みの子^こ
 の君うらやましげに見居たまひて、かち給はゞさもこそ
 嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはゞさもこ
 そくやしからめと打^{うち}うめきて笑はれにき。かゝりしほど
 に師の君も友だちの君たちも来給ひぬ。龍子^{たつこ}の君、静子^{しづこ}
 の君はきそひ舟見^{ぶねみ}にまねかれ給ひてこなたのむしろには
 後^{のち}にこそつらならめとて出行^{いでゆき}給ふ。難陳^{なんちん}などもよふすほ
 どまことに心や空にあくがれけん花のかけ斗^{ばかり}みえてそ
 ぞろにすぎぬ。折から花火のあがりぬれば師の君

花にはなびをそへてみるかな

とかき給ひて此このかみつけ給へと伊東の夏子なつこぬしにしめ
させ給へば、君たゞちに、

思ふどちまとるさへうれしきを

とかいしるし給ひてさしおき給ふさま例ながら優いにう
るはしうこそ。更にみの子この君きみ句のしもかき給ふ、

かはづ蛙の声ものどけかりけり

おのれにかみをとすゝめたまふに打おどろかれて、か
の花かげにあくがれありくうかれごころよび心呼かへすなどまこ
とにあわたゞし。時うつるとせめられて、

おもふどちおもふことなき花かげは

といひたらんやう成なりしがうつしごとことろならねば覚え
 ず。猶君たちの玉の言ことの葉いとしげかりしもみな忘れに
 けり。この事終りて後のち久子の君が引すさび給ひし琴のね
 は心なきおのれさへ松風のひゞきともやいふべからんと
 思はれ侍りき。いでや日もくれなんとすなるを御みことの
 ねに心はひかるゝものから、花かげのくらくならんもい
 とをしければと師の君のの給ふ折しも、龍たっこ子の君もしづ
 子の君も歸り来給ひぬ。あるじの君今しばしとも、の給
 ひしかど、まかり申して出いでぬ。供ともなる男子をのこども、酒など
 給ふほどなれば後あとよりこよとて、師の君はじめ十三四人

して堤には来たりぬ。折しも日かげは西にかたぶきて夕
 風少し冷ひやかなるに、咲さあまりたる花の三つ二つ散ちりみだ
 るゝは小蝶こてふなどのまふやうにみえてをかし。酔よひしれたる
 人の若き君たちにざれ言ごとなどいひかくるぞろうがはしく
 もいとにくし。やうく日の暮行くままにそれらの人は
 かげもとゝめずなりにたれば、今は心安こころやすしとて花の木
 かげたちめぐり、おのがじゝざれかはすほどにいつしか
 名残なく暮はてゝ、川の面おもをみ渡せば水上は白きぬき衣を引
 たるやうに霞むかみて向むかひのきしの火ほかげ斗ばかりかすかにみゆ
 るも哀れなり。いでやまかりなんよ、月だにあらばよか

るべきよなんめるを中々にうしろめたければと師の君の
 の給ふも実げにことわり、若き君たちのみなればなり。今
 しばしともいはまほしけれど、供をのこの男子なども来てそゝ
 のかせば、いとをしけれど木こかげ立はなれて車ものする
 折から、春雨はるさめ少し降ふりそめぬれば別れの涙にこそとの給ひ
 かはず。枕ゆきわかばしまではもろとも成なりしが、こゝよりおのが
 じゝ行ゆきわか別れ給ふさままことに残りをしげなり。まことに
 春のうちの春ともいふべき日なりと思ふにも、今しばし
 空はれの晴なましかばとおもはるゝはかの蜀しよくをのぞむとか
 いへる人心ひんしんにや。

十五日 雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしがかね
 て紹介の勞らうを取たまはりたる半井なからゐうしに初はじめてまみえ参まゐ
 らする日なり。ひる過すぐる頃より家をば出いでぬ。君が住給ふ
 は海近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。かね
 て一ひとたび鶴田つるだといふ人までもものすること有ありて其家そのいへへは行ゆき
 たる事もあれば、案内はよくしりたり。愛宕下あたごしたの通りに
 て何なにとやらんいへる寄席ゆきのうらを行て突当りの左り手が
 それなり。門もんくゞりいりておとなへばいらへして出いできま
 せしは妹の君なり。此方こなたへとの給はすまゝに、左手の廊

下より座敷のうちへとともなは伴れいるに、兄はまだ帰り侍はべら
 ず今暫く待給まちたまひねと聞え給ひぬ。誠や君は東京朝日新聞
 の記者として小説に雑報に常に君があづかり給ふ所にお
 はせば、さもこそはひまもなくおはすべけれと思ひつゞ
 くるほどに、門もんの外に車のとまるおとのするは帰り給ひ
 しなりけり。やがて服など常のにあらため給ひて出いでおは
 したり。初見しよけんの挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだ
 かゝることならはねば耳ほてり唇かはきていふべき言ことも
 おぼえず、のよべき詞ことばもなく、ひたぶるに礼をなす
 のみなりき。よそめいか斗ばかりおこなりけんと思ふもはづ

かし。君はとしの頃ころみそぢ卅年にやおはすらん、姿すがた形かたちなど取立とりたて
 てしるし置かんもいと無礼なめなれど、我が思ふ所わのまゝを
 かくになん。色いと良く面おもておだやかに少し笑み給へる
 さま誠に三才の童子もなつくべくこそ覚ゆれ。丈たけは世の
 人にすぐれて高く、肉豊かにこえ給へばまことに見上みあぐる
 様になん。おもむろに当時の小説のさまなど物語り聞きかし
 給ひて、我わが思ふに叶かなふべきは人好まず、人このまねば世
 にもて遊ばれず、日本の読者の眼の幼えうちなる新聞の小説
 といはゞ有ありふれたる奸臣賊子かんしんぞくしの伝でん或あるひは奸婦かんぶいん女ぢよの事じ
 跡せき様の事をつゞらざれば世にうれざるをいかにせん、我われ

今いま著あす幾多の小説いつも我わが心に 屑いさぎよしとしてかきたるも
 のはあらざるなり、されば世の学者といはれ識者の名あ
 る人々には批難攻撃面おもても向けがたけれど、いかにせん我われ
 は名誉の為め著作するにあらず、弟妹父母ていまいふぼに衣食いしよくさせん
 が故なり、其その父母弟妹の為に受くるや批難もとより辞じ
 せざるのみ、もし時ありて我われわが心もちを持って小説をあら
 はすの日あらんか甘んじて其その批難を受けざるなりとの給
 ひ終はつて大笑たいせうし給ふさま誠にさこそと思はれ侍れ。猶
 の給はく、君が小説をかゝんといふ事わけ訳野々宮君ぎみよりよ
 く聞及び侍りぬ、さこそはくるしくもおはすらめどしば

しのほどにこそ忍び給ひね、我師われしといはれん能のうはあらね
 ど談合の相手にはいつにても成りなん。遠慮なく来給へ
 といとねんごろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにもま
 づ涙こぼれぬ。物語りども少しする程に夕げしたゝめ給
 へとて種々くさぐさものして出されたり。まだ交まじはりもふかゝらぬ
 ものをと思へばしばく辞じすに、君、我家にては田舎も
 のゝ習ふるひ旧ふるき友と新まらしきとをとはず美味美食はかきた
 れど箸をあげさせ参まゐらするを例とす、心よくくひ給はゞ
 猶なほこそ喜うれしけれ、我われも御相伴おしやうばんをなすべきにとあまたゝび
 聞え給へば、いろひもやらでたうべ終りぬ。かゝりしほ

どに雨はいや降ふりに降しきり、日はやうくくらく成ぬ。
 いでや暇いとまたま給はりなんといへば、君車はかねてもものし置おき
 たりくわいぶんだけさしおのりてよとの給ふ。帰かへさにしたゝめ置おきたる小説の草
 稿一回分丈差置きて君が著作の小説四五冊を借参かりまゐらせ
 て出いでぬ、君かくまなきみ心ごころぞへの慕したはしく八時といふ頃
 にぞ家に帰りつけり。

《略》

《四月》二十二日 例の午後よりなから井みうしをとふ。
 種々のもの語りども聞えしらせ給ひて先の日の小説の一

回新聞にのせんには少し長文なるが上に余り和文めかし
 き所多かり、今少し俗調にと教へ給ふ。猶さまぐくの学
 者達をも紹介し参らせんなれどいさゝかさわる所なきに
 しもあらねばやみぬ、されど吾友わがとも小宮山即真居士は良師
 ともいふべき人なれば此君このきみのみには引合せ参らせんなど
 の給ひ聞ゆ。昨夜かきたる丈だけの小説の添刪給へとて差置
 たるまゝ此日は早々帰りぬ。人ひとたび一度みてよき人も二度め
 にはさらぬもあり、うしは先の日ま見え参らせたるより、
 今日またしたは又親しさまさりて、世に有難き人哉とぞ思ひ寄よりぬ。

《略》

《五月》十五日　ひる過るすくほどより契りちぎしやうに半井なからゐの
 うしを平河町にとふ。こたびの家はいとめでたき所なり
 けり。行てゆきのちしばし有ありて歸らせ給ふ。何等なにらのみ用にや
 とゝひ参らするに、いなとよ我がしる大阪の書しにて雑
 誌をこたび発はつた兌だせんとす小説かく人世話し給はれと申し
 つれば君をこそと物語りおきつるなれ、さるをあやにく
 に露国太子殿下の急変にて俄にはかに用事出来たりとて今朝
 しも汽車にて歸き阪はんなしたり、断りまゐらせんともおもひ
 たれどはや及ばじとおもひてさしおきぬ、百ひやくごい罪ざいゆるし

給たまひてよと詫給わびたまふも心ぐるし。此日はものがたり少しして帰る、日没前なり成し。

廿七日 前約なりの小説稿成しをもて桃水ぬしにおもむく。今日は我れ例刻れいこくより遅かりしをもて君既きにおぼしき。種々我わがため為よかれのものがたりども聞えしらせ給ふ。帰宅はべらし侍はべらんとする時に今しばし待給へ、君に参らせんとて今料理させおくものゝ侍ればとまめやかにの給ふを例のあらくもいろひかねて其そのまゝとゞまる。やがて料理は出来ぬ、こは朝てうせん元山げんざんの鶴なりとなり。さる遠方のもの

と聞くにこと更にめでたし。たふべ終れば君いでや帰り
給へよ、あまりくらくなり成やし侍らんなど聞え給ひて、今日けふ
もみ車たまはりぬ。かへりしは七時。

日本文学電子図書館

若葉かげ(抄)

著 者：樋口一葉

制作者：宮澤一郎

底 本：「樋口一葉 日記・書簡集」
ちくま文庫、筑摩書房

2005年11月10日 第一刷発行

日本文学電子図書館